

# 序章

## 再起動



1991年、私は東京の測量会社を辞し、地元・高知で父が営む工務店に勤務していました。23歳でした。

10代はパソコン雑誌にプログラムを投稿したり、新聞やテレビで「学生プログラマー」として取材を受けたりもしましたが、大学生になってからはプログラミングと縁を切っていました。番組制作会社のアルバイトで映像制作に携わるのが楽しかったですし、父の工務店で働き始めてからも、休日に番組取材や編集を手伝っていました。

でも、好きなこと・やりたいことより、その人の得意なことに仕事は回ってくるものです。

地元の中堅企業が販売システムを更新する際に、販売データが移行できない、という問題が生じました。この企業の社長が父の友人で「どうにかできないか」と私に相談を持ち掛けたのが、プログラマーとしての私の再起動でした。片手間で2週間程度の仕事でしたが、その謝礼が「20万円」と高額で驚いたのを覚えています。それをきっかけに、ソフト開発の仕事が入るようになり、私は父の工務店から独立することになりました。

同じ高知の中心市街地で事務所を構え、私はそこに「パソコンショップ」を併設しました。プログラマーの事務所は、あまり来客がありません。1人でやっていたら誰ともしゃべりません。パソコンショップであれば多少賑やかになりますし、何より現金収入があります。ソフトウェアは数週間から数ヶ月・ときには数年かけて作ります。その期間は無収入です。パソコンショップの現金収入はありがたいものです。

1年経つ頃には、昼間のご老人サロン、夕方は中高生のたまり場、夜は近所の子供が寝る前に散歩名目でPCゲームをしにくるような地域コミュニティの場所になりました。展示している中古PCを自由に触れるように開放していたこともあるでしょう。徐々に「ミニ教室」ようになっていったのです。

そうした中、昼間通ってくる高齢者のお1人で「コウ(幸)さん」という70代後半の女性がおられました。ボリュームのある白髪にパーマをかけ、ワードプロセッサ(ワープロ)を左手に抱え、常に整った身なりでこられました。コウさんのたたずまい、特にスッと伸びた背筋が、茶道か日本舞踊の心得を思わせます。もともとは、東京か神奈川にお住まいだったようです。詳しくはわか

りません。なぜならコウさんは自分のことをおっしゃれないのです。コウさんは4年前から脳梗塞による右手麻痺と失語症を患ってらっしゃいました。

いま思い返せば、コウさんの失語症は「ブローカ失語」というタイプで、言葉は理解できるが、自分から発することは難しい、というものでした。まったくしゃべれないわけではなく「こ……ここ……こんにちは」というように、言葉の最初の文字はいえるけど、続きが出てこないという状態です。

コウさんは、右手の麻痺で文字を書くことができず、電話でもしゃべれません。そのため遠方の親戚や友人とやりとりができません。しかし指一本で活字がプリントアウトできるワープロなら、あて名書き・本文を自分1人で書くことができるのではないかと。コウさんはそう考えたようでした。

意図を理解した私でしたが、実際に教え始めると思ったとおり困難の連続でした。高齢者はIT機器の操作が苦手になりがちです。最も大きな理由は「リエゾンの欠落」です。リエゾン(英 *liaison*)とは、結び付き・橋渡し・連携といった意味です。IT機器の多くは「複数の機能」を結び付けて使うことで、複雑な作業を可能にしています。たとえばワープロで、文章の一部を別の部分からとってくる、という作業。これを、コピーアンドペーストと呼びます。すなわち「文字列選択」「コピー」「カーソルをコピー先に移動」「ペースト」という4段階の操作です。

高齢者もそれぞれの機能は覚えられます。一時的にやり方を思い出せなくても、こうすればいいですよ? と見本を示せば「あーそうだった、そうだった」というのです。記憶はできるのです。ところが「文字列選択」「コピー」「カーソルをコピー先に移動」「ペースト」という一連の操作を結び付けて思い出すのは、多くの高齢者が苦手とします。それぞれの動作のたびに「ハテどうしたものだったけ?」と止まるのです。これがリエゾンの欠落です。理由は年齢による記憶力の減退……もあるのですが、生きてきた文化が「一つのボタン」に「一組の意味」しかなかったから、というのが大きいのでしょう。家電のボタンがそうです。

そのことは私も承知していましたが、コウさんの場合はもっと深刻でした。カナを入力し、変換、一覧から漢字を選択するという3ステップが把握できませんでした。だいたいの高齢者は3ステップのリエゾンまではできるのですが、

コウさんは2ステップが精一杯でした。

詰みました。少なくともワープロを学ぶという方向は。

どうしたものかという私の表情を汲んだコウさんは、「こここ……これ、いいい……印刷」と私にメモ帖を開いて見せました。コウさんが指さしたそこには、達筆に「清子」と書かれていました。「これを入力する方法ですか？」と尋ねると、コウさんは申し訳なさそうに、うなずきました。

キ・ヨ・コ、変換、(選ぶ)、確定

その4段階を紙に書き、目の前で実演しました。コウさんは、紙に書かれた手順を、ひとつひとつ指で追ひ、何度も失敗しながら、どうにかして「清子」という字を打とうとされました。その表情は真剣そのもの……というよりも、画面をにらみつけているような差し迫った気迫がありました。

その日からコウさんは「清子」という字を打つためだけに、教室に通ってくるようになりました。清子という方が、どんな人なのか私に知るすべはありませんでした。

しばらくして私は思いつきました。コウさんがやりたいのはワープロを使うことではない、人とコミュニケーションをしたいのだ、と。

コウさんは最初の1文字目は出てきます。ならば……

私は、当時出たばかりのCD-ROM電子辞書で「カナ前方一致検索」をするFEP(フロントエンドプロセッサ)を簡易製作しました。いまでいう「入力予測機能」と同じものです。1~2文字をカナ入力するとCD-ROMから熟語候補を引き画面に表示しました。カナを入力し、候補の一覧からカーソルで選ぶ、という2.5ステップの操作。懸念しましたが、幸いにもコウさんは、これを使うことができました。そして1時間ほどで「うれしい」「うれしい」「うれしい」と3回書いて、私の手をにぎって何度も頭を下げられました。この「コウさん専用FEP」を、私は中古のNEC98ノートにインストールして「おうちで練習してください」と無料で貸し渡しました。

翌週、コウさんを担当する保健師さんが来店され「あれは売り物なのか？」

と尋ねられました。コウさんとのコミュニケーションが格段に向上した、ぜひとも、ほかの方にも使ってもらいたいということでした。「売り物じゃない」と正直に答えました。CD-ROM辞書はNECの販促物でしたし、入力処理はマイクロソフトのドライバを流用していました。個人開発したものを個人が使うから、お目こぼしが期待できる程度のものでした。

とはいえダメもとでNECとマイクロソフトに連絡をとり事情を伝えたところ、NECは「あなたのソフトウェアに当社広告を付属する」という名目なら無償で配っていいとして、CD-ROMを10枚送ってくださり、足りなさや補充すると。マイクロソフトはMS-DOSを買ってくれたら、ドライバを無償で使っていいよ、という英文のレターを米国デラウェア州から届けてくれました。両社の厚意により、このFEPは、その後15年近く福祉現場で使われることになります。どれだけコピーされたか見当もつきません。

それよりも、私のやりがいになったのは、コウさんご自身とコミュニケーションがとれるようになったことでした。FEPを使って、コウさんは少しずつご自身のことを語ってくださいました。

コウさんは、失語症を発症するまでは書道の師範であり、地元では著名な俳人でした。ご主人は旧海軍の軍人で空母・加賀の乗員でした。ご夫婦は神奈川県川崎市に住まわれていましたが、ご主人が戦場に赴き、お住まいは防火帯建設で地区まるごと疎開となり、コウさんは昭和17年(1942年)に7歳の長女を連れて、満州ハルビンの親類のもとに移住します。ところが昭和20年8月(1945年)のソビエト参戦により、満州は戦場となります。貨物列車に乗って逃げる中、10歳の長女は発疹チフスを発症しました。抗生剤がなかったこの当時、発疹チフスは致死率の高い病気であり、やがて肺炎となった長女は陸軍病院(兵站病院)のテントの中、故国を夢見ながら息を引き取られました。

その長女のお名前が「清子」でした。メモ帖に書かれた達筆の字はコウさんが書かれたものでした。

昭和21年(1946年)、コウさんは帰国しましたが、住んでいた川崎に家はなく、ご主人とも連絡がつかないため、満州開拓団の多かった高知に友人とともに住むようになったのだそうです。幸いなことに、ご主人は生存しておられやがて再会、ご夫婦ともに高知で暮らし始めました。

新たに一男一女をもうけますが、長女の清子を忘れる日はなく、朝に、晩に、その名前をつぶやいて、おはよう、おやすみなさいとコウさんは祈り続けていました。コウさんの詠まれた俳句の中に、亡き娘を想う歌があり、コウさんの痛みは癒えるものではないことを、誰にとなく静かに叫んでいる様子がかがえました。その気持ちを共に哀しんでくれたご主人が亡くなられてから久しく、ある日遊びに来ていた孫の昼ご飯を作っていたとき、コウさんは倒れました。ぐるぐる視界が回る中、自分はもう死ぬんだと思ったそうです。そして「キヨちゃん、キヨちゃん」と長女の名前を呼び続け、わからなくなった、とおっしゃいました。

運ばれた病院で意識は回復しましたが、そのときすでに病院の先生や看護師のいっていることがわからず、自分に起きていることを認識するのに数ヶ月後かかったといいます。最も落胆したのは、長女の名前が思い出せないことでした。長女のことは、なんだって克明に思い出せる。長女が亡くなる前日、長女と最後に交わした会話は、川崎のおうちの井戸水が冷たくて気持ちよかったこと。その情景も全部覚えている。声も覚えている。だけど言葉だけが消えている。名前も出てこない。自分のカラダのうちに残る長女の痕跡を、ひとかけらも失うまいと、大切に抱きしめ続けてきた記憶を、自分は失ってしまった。そのことが惜しくて惜しくてしめつけられる心持ちだったそうです。

言語障害は時間の経過とともに日常生活が営める程度には回復しました。しかし、自ら話す「発話」は障害が残ったままとなりました。

転機が訪れたのは、発症から3年後。コウさんの俳句仲間が集まり、コウさんの歌集を自費出版する企画が立ち上がったときでした。俳句仲間の1人が持ち込んだワープロ専用機を見て、これなら自分に使えるかもしれない、と感じたのでした。

コウさんは、長女の名前をいえなくとも、文字に出して亡き娘とお話をしたかったのだと思います。さっそく購入し、複数のワープロ教室に通って見ましたが、ついていけず、やはりダメなのかとあきらめていたところ、自身のペースで通える私の教室を知った、というわけでした。

結果としてコウさんのワープロ習得はなりませんでしたが、代わりにコウさんはパソコンが使えるようになりました。それにとどまらず、コウさんの発話

機能も少しずつですが回復し始めたのです。「コウさん専用FEP」が入力支援をすることで、コウさんの言語機能の刺激になったのかもしれませんが、コミュニケーション量が飛躍的に増えたことで、コウさんの脳内に残された別の部分が言語機能を代替し始めたのかもしれませんが。

私の上京に伴い、教室は1996年でいったん幕を下ろしました。私の本業のほうで開発したアプリケーションの売れ行きが好調で、東京に事務所を構えることになったためです。ですが、コウさんとのやりとりは続き、帰郷して会いに行くたびに「高知に戻ってまた教室を開いてほしい」「結婚はまだか」と私をせつづいて、回復ぶりを見せられました。

コウさんは2010年に老衰により94年の生涯を閉じられました。ご子息によれば介護施設の陽の当たるベランダで洗面器の水をなでながら「キヨちゃん」といったのが、母から聞こえた最期の言葉だったそうです。



私はソフトウェアが、人生を変えようと思っただけではありません。しかしソフトウェアが、その人の姿勢を変えることで、結果として人生を変えることはあると思っています。

これは他者に対してだけでなく自分自身に対しても同じです。自分というのは変えたくてもなかなか変えられないものですが、姿勢だけなら比較的容易に変えられます。姿勢を変えたその時間と積み重ねが、自分を変えていくことはあると思います。とりわけ、プログラミングを始める……すなわちソフトウェアを「使う人」から「作る人」への姿勢変化は、様々な新しい変化をその人にもたらすでしょう。そこから始まった変化は、それまでにない視点へとつながり、自分自身だけでなく周囲も変える可能性を秘めています。

ただ。なぜその人はプログラミングを学びたい、と一歩を踏み出したのか。「教える側」が、そのことに思い至れてきたといえるでしょうか。パソコンを習いたい、プログラミングをしてみたい、といわれれば、教える側はつい「目標」を設定し、それに必要な「基礎力」に意識が向いてしまいます。その人がなぜその一歩を踏み出そうとしたのか、その人の背中を押したものはなんなのかは

顧みられません。しかし、学習者の多くはその一步を踏み出した、その理由にこそモチベーションの種火が灯っています。そのモチベーションを次の大きな火につなぐ前に、目標だの基礎力だのいわれてしまうと、数日で・あるいは数分で情熱が冷めてしまうかもしれません。

事実、これだけ独習用のプログラミング入門書が売られていますが、それによってプログラミングできるようになる人は5%に満たない、と著者の間で語られます。米国のある調査では、独学でプログラミングを始めた人の90%以上が1週間で挫折するといいます。せっかく踏み出した一步を、教える側が台無しにしているかもしれません。

そこで私は、一度プログラミングに挫折してしまった人でも再起動できる本を書くことにしました。本書が対象とする読者は、既存の学習方法では挫折してしまう90%以上の人です。プログラミングに際し、人の学習スタイルにはいくつかの属性があります。これにピシッと合わない人、人はたやすく挫折してしまうものなのです。逆に本書は、プログラミングを挫折したことがないという人に対しては書かれていません。既存の学習方法でプログラミングができる人にとって、本書は「イライラする」「むしろわかりにくい」かもしれません。その理由も本書は説明します。

本書は、プログラマーとなる人の属性に基づき、そもそもプログラミング学習はどうすればよいのか、という点を主に扱います。学習のやり方や教科書選びからやりなめます。ですからプログラミング言語はなんだってかまいません。本書はそれらの副読本になります。

やりなおそうと思った人全員を、本書が再起動させます。

本書の刊行に際し、万難を排して共同執筆してくれた臨床心理士の妻。あなたがなければ本書は絶対に成り立ちませんでした。そして、その妻にこころよく執筆許可を送ってくださった防衛省関係各位、ならびに書籍化に向けて尽力くださった株式会社技術評論社・池本公平氏にこころより感謝申し上げます。

(山崎晴可)